

ブロッコリースプラウト成分の長期摂取

認知機能の維持効果

カゴメ(本社名古屋市)と弘前大学大学院医学研究科バイオメディカルリサーチセンター分子生体防御学講座の伊東健教授を中心とする研究グループは5日、ブロッコリースプラウト由来成分「スルフォラファングルコシノレート」の長期摂取が、認知機能の維持に寄与する可能性を確認したと発表

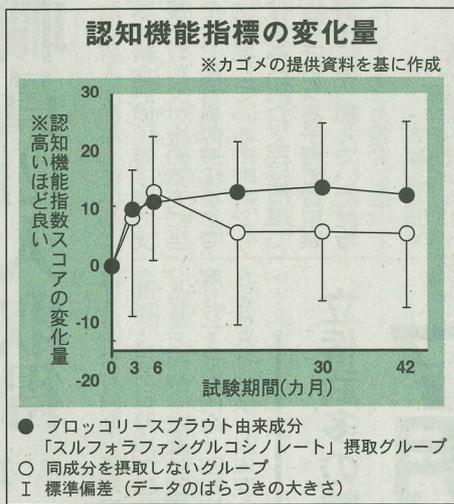


清水直主任

カゴメと弘大研究グループ

した。認知機能低下リスクが高い高齢者を対象に行った3年半にわたる研究成果。社会全体の健康寿命延伸に向け、取り組みやすく長く続けられる食事対策として期待される。(稲葉智絵)

食事の手軽に健康寿命延伸に期待



研究は弘前大COI-NEXTと同社の共同研究「野菜生命科学講座」で実施。成果は1月26日、栄養学に関する国際的な科学オンライン雑誌「Frontiers in Nutrition」に掲載された。認知症は、正常な状態から軽度認知障害を経て進行するとされており、軽度の段階に適切な対策を取ることによって認知機能低下を防ぐとされている。厚生労働省の2022年度調査推計によると、高齢者(65歳以上)

の認知症の割合は約12%、軽度認知障害の割合は約16%で、3人に1人が認知機能低下が見られた。研究グループは、認知機能低下リスクが高い高齢者に対する効果と、1年を超える長期的な予防効果を検証するため、20年ごころ研究をスタート。軽度認知障害判定者を含むリスクが高い県内の63〜90歳の男女26人を対象に、スルフォラファングルコシノレートを含むサプリメントを摂取したグループと、同成分を含まない

定期的な認知機能テストを行った結果、同成分を摂取したグループは、摂取していないグループに比べて、認知機能スコアが高く維持された。長期的に見ても高いまま維持していた。軽度認知障害判定者のみを比較した場合でも、同様の結果が得られた。研究担当の同社食健康研究所研究推進グループの清水直主任は「安全かつ取り組みやすい食事を通じた認知機能維持の可能性を見いだせたことをうれしく思う。今後は早期対応の効果といった詳細研究を進めて

いきたい」と意気込んだ。弘前大COI-NEXT拠点長の村下公一副学長は「高齢化が進む日本にとって、認知機能は関心の高いテーマ。その機能を維持する効果を示した今回の研究は、社会的意義が高い成果となった」と喜んだ。